（講評）
演劇ユニット　京都怪演隊『父帰る・冬の朝』

　俳優陣の演技は達者で、演出も戯曲の意図を汲み、ユーモラスにわかりやすく観客に伝える力があると感じた。
　昭和を感じさせる小道具やモチーフは、昭和を生きた人の興味や関心を引きつけ、ノスタルジーを感じさせる効果あった。作者はある程度の年齢層を意識して作品を書いており、そうした人たちの多くにとって現在おそらく切実な問題であろう、介護や遺産相続、晩年の生き方といったテーマに向き合いながら、現実をユーモラスに描きつつ高齢者の「未来」をポジティブに捉えようとしているように感じた。最も老いているはずの父親が結婚するというオチは、晩年をどう過ごすかということに対して、前向きな気持ちにさせてくれる結末で好感を持った。

　肝心の父親がでてこない仕掛けは、展開に期待をもたせることには効果があったが、出現を遅らせて期待を膨らませたことで、観客の多くは期待を良い意味で裏切るような意外な出現や、現れないことに対する納得の理由を期待したように思う。「気まぐれ」という本人の個性によるだけの理由ではちょっと肩透かしを食った感覚がしたのではないだろうか。ここに作品を締めくくるイキな仕掛けがあれば、作品の厚みが増し完成度はより上がったように思う。

杉山準